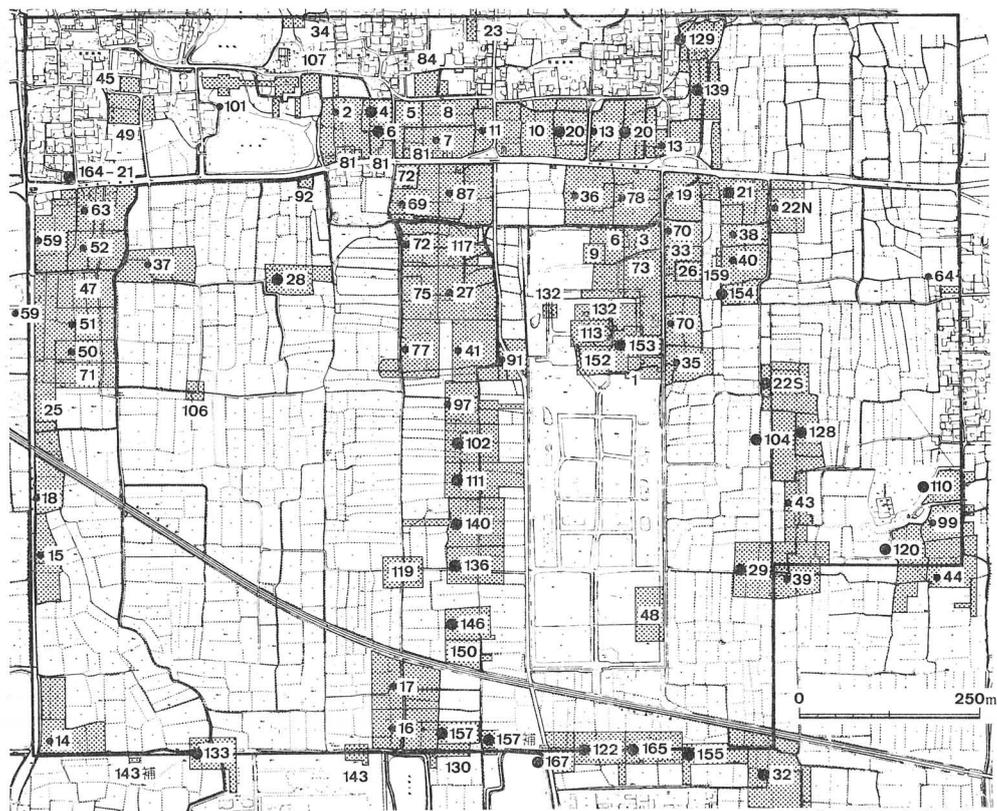


## 第2章 墨書土器を出土した 主な遺構

墨書土器は、ほぼ平城宮の全域から出土するが、その大半は溝からである。ほかには土壌、井戸などからも出土し、包含層からの出土数も多い。ここでは、比較的まとまって墨書土器の出土した遺構を中心に概略を述べることにする。

**SD1250** 平城宮南面の外堀で、同時に二条大路北側溝をかねる。ほかの溝と合流するところでは極端に広く、また深くなっているが、それ以外のところでの平均的な大きさは、上端で幅3~4m、深さ0.9~1.2mである。随所に杭とシガラミによる護岸が認められ、壬生門(南面東門)の前面では、石積による護岸がおこなわれていた。ここではまた、奈良時代後半に、溝の堆積土を除去することなく埋め立て、通路としていることもわかっている。若犬養門(南面西門)の前面では、橋脚を確認した。墨書土器は、第32次、第122次、第133次、第155次、第165次の各調査区で出土しているが、『集成I』に報告した第32次調査(41点)と、本『集成II』にかかげた第133次調査での若犬養門前面(51点)に出土量が集中し、「雅楽」のほか、「厨菜」など「厨」関係のものがまとまって出土している。

**SD2700** 内裏東外郭官衙と東方官衙群の間を南流する南北溝で、平城宮の幹線水路と考えるものである。昭和3(1928)年と同7(1932)年に奈良県技師岸熊吉氏によって確認され、平城



平城宮跡墨書土器出土調査区

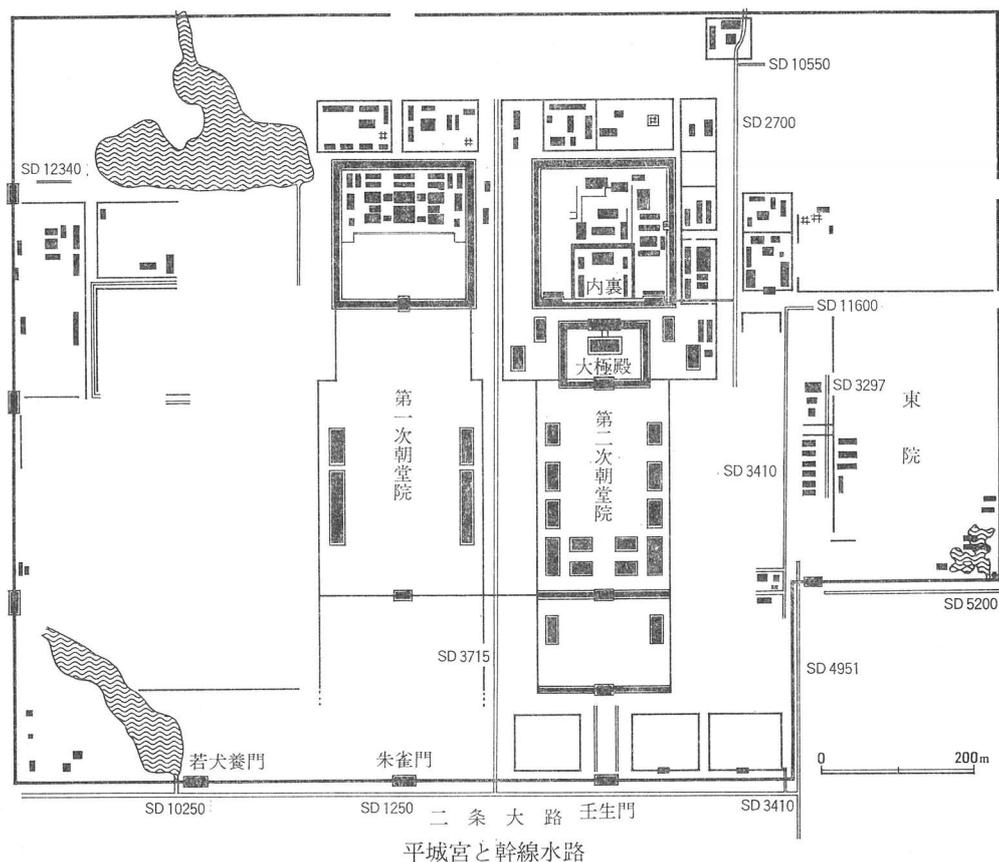
- 本集成に掲載した調査区
- 「集成I」に掲載した調査区

宮跡発掘調査部でも第21次調査以来、第129次、第139次、第154次と数次にわたる調査を実施して、溝の規模と構造を明らかにしてきた。溝の大きさは、北の方の第129次と第133次調査区では、上端で幅約2m、下端で0.9m、深さ1.4mであるが、南の方の第154次調査区では、幅6m前後に広がり、深さも2.2mある。溝は、奈良時代当初はすべて素掘りと考えられるが、養老年間頃より一部に石積の護岸が施される。護岸の状況をみると、第129次調査区で確認した北端部はすべて素掘り、第139次調査区の途中から南は兩岸とも約30cm大の河原石で護岸、第21次調査区の南端から第154次調査区にかけては東側だけ護岸、そして東の埴積官衙の終わるあたりで東岸の護岸もなくなる。このことから石積の護岸は、内裏の東側あたりに限られていたものと考えられ、西側の護岸については抜き取られた可能性もある。

第139次調査区では、溝の北端を確認している。ここでは奈良時代当初にはおそらく水上池から西南にかけて流れる細い斜溝にはじまり、南折して真直ぐに南へ流れていたが、天平年間に大幅に東につかえている。溝の堆積土は、5～6層に分かれ、各層とも土器、瓦、木器、木簡、金属製品など多彩な遺物が大量に含まれていた。さながら平城宮における遺物の宝庫の観を呈している。墨書土器もすべての調査区で出土しており、今回報告するものだけでも、331点と最も多い。中に、「天平18(746)年11月20日」の年紀の入ったもの(522)もある。

本集成には、『集成I』で報告済みの第21次調査の補遺も加えた。なお、岸熊吉氏が調査したときに出土した遺物の一部は、溝辺文一氏が保管しているが、これについても、氏のご好意によりあわせて再掲載させていただいた。

**SD3109** 東院の西を限る南北築地塀の東雨落溝である。第128次調査で検出した。溝幅は約10.7mで、西岸は径13.0cmの丸太を半裁した杭を打ち、この外側に側板を落としこんで護



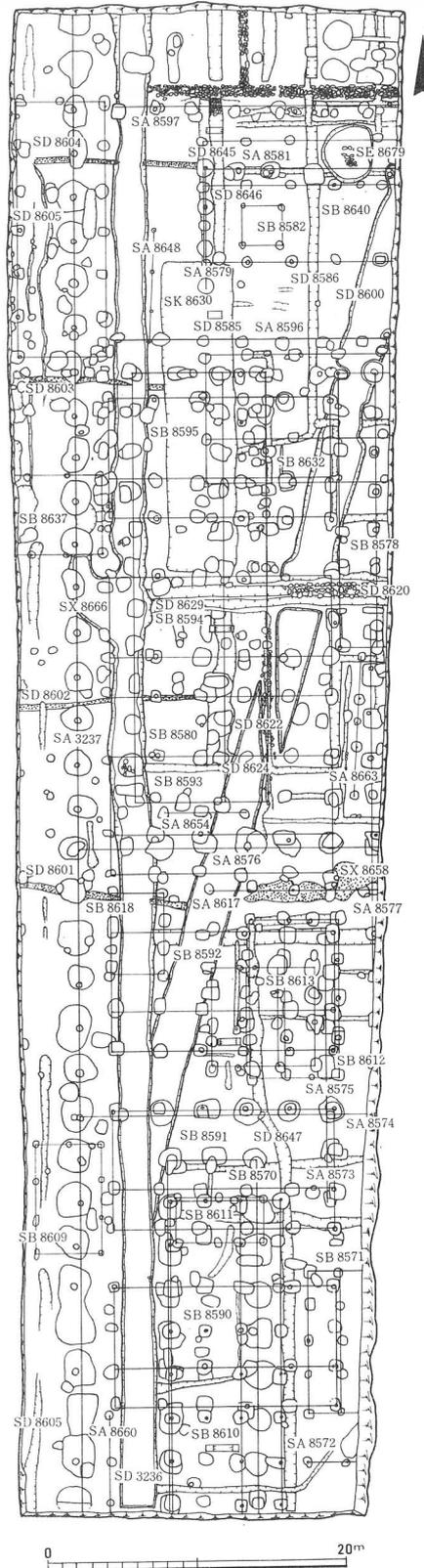
岸としている。底には全面に玉石を敷く。木筒をはじめ、大量の土器が出土しているが、食器類の多いが目立つ。年代的には奈良時代後半のものである。墨書土器は、「造宮」、「供養」、「菓子」など87点が出土した。

**SD3113** 東院地区西方の南北溝で、一部斜行する。第22次南調査区でも確認しているが、今回報告するのは第128次調査で検出したものである。溝幅 2.0m、深さ 0.8m で、上下2層に分かれる。東側をほぼ平行して流れるSD9620（後述）を西へつけかえたもの。溝中より、「天平勝宝」の木筒が出土しているので、この時期まで存続していたものと思われる。墨書土器は、25点。

**SD3236** 東院地区の西端を流れる、素掘りの南北溝である。第22次南調査区（『集成I』で報告済み）と第104次調査区で確認した。溝は3時期に分かれ、下層と中層は溝幅約2m、深さ0.6m、上層はやや小さく、溝幅0.9m、深さ0.15mである。下層溝の西岸には、一部木杭による護岸がある。各層とも実年代には大きなへだたりはなく、奈良時代後期の溝である。下層、中層の溝中からは、「天平勝宝」から「宝亀6年」までの紀年木筒8点をはじめ、多量の木筒、土器、瓦が出土した。土器は、大部分が平城宮土器編年のV、軒瓦は、平城宮瓦編年Ⅲ期に属する。墨書土器は、129点と多いが、大半が中層の出土である。

**SD3410** 平城宮東部の南北幹線水路である。第22次南、第29次、第154次、第155次の各調査区で確認した。大極殿後殿の東方約230m付近で、東からくるSD11600（後述）が直角に折れ、SD3410となって東院張り出し部との境を南流し、平城宮東南隅で、南外堀であるSD1250に合流する。溝幅は、北の方（第154次）では、4~5mであるが、南の方（第155次）では、約9mに広がる。深さは、1~1.3mある。護岸の施設は、上流では西岸

だけに約50cm大の玉石積を設けていて、2~5段が遺存していた。しかし当初は素掘りとみられ、後に西岸を改修して玉石積にし、東岸は木杭で護岸している。西岸の玉石積も南では木杭になる。玉石積への改修の時期は、裏ごめに平城宮瓦編年Ⅲ期の軒瓦6282G・6721Dなどが



第104次調査区遺構図



雨落溝として機能し、東面築地を抜けてS D2700に合流する。第154次調査で合流部を検出した。第33次調査で明らかにした東外郭官衙部では、凝灰岩の切石で護岸していたが、東面築地を抜けたところから素掘りとなる。溝幅は、西端で2.4 m、合流付近では約6 mに広がっている。深さは1~2.2 m。木簡をはじめ、多量の土器、瓦が出土した。墨書土器は、14点あり、中に「政所」がある。

**SD4951** 平城宮の東外堀で、同時に東一坊大路西側溝をかねる。第32次、第39次調査区で検出している。ここでは、第32次調査に出土したものの補遺をかかげる。第32次調査での遺構番号は、『年報1966』と『平城概報4』では、S D4090になっているが、第39次調査で検出したS D4951の南延長であることははっきりしているので、この番号に統一した(『平城宮木簡三解説』p. 38参照)。溝幅は、第39次調査では、約3 mであるが、下流の第32次調査区では、約7 mに広がる。溝の東側は路面幅約22 mの東一坊大路である。溝の堆積は、大きくは3層にわかれる。下層に堆積する砂の層から、遺物が多量に出土した。木簡、瓦、木製品、金属製品、石製品の各種にわたっている。墨書土器も多く出土した。

**SD5200** 二条々間大路の北側溝にあたる。これまでも第39次、第44次調査で検出しているが、今回報告するのは、東院東南隅の第120次調査で検出したものである。溝はA、B 2時期に分かれ、B期は3 m南へずらしてつくられている。B期の溝幅は約3 m、石積の護岸がされている。A期の溝より出土した木簡により改修の時期は天平12年以降である。墨書土器は3点出土した。

**SD8600** 東院地区西端で東北から西南へ斜行する溝である。第104次調査で検出した。溝幅は約3 m、深さ0.6 m、両岸はシガラミで護岸し、遺存状況は良好であった。多量の木簡、土器が出土している。この溝を埋め立てた整地土中より出土した木簡はすべて和銅年間のものである。土器も、平城宮土器編年のI、IIに限られ、溝の存続期間は、平城宮造営当初から天平初年頃までに限定できる。奈良時代初期の木簡、土器の一括大量出土例として重要である。瓦埴類はほとんど出土していない。墨書土器は少なく、10点である。

**SK9608** 東院地区西方官衙の土壙である。第128次調査区の東端で検出した。A、B、C 三つの土壙が重なっている。最も古いAの底からは「蔵人」、「蔵人所」が出土した。土器は平城宮土器編年Ⅲに相当する。

**SD9620** 東院地区西方の南北方向斜行溝である。第128次調査で確認した。溝幅は3 m、深さ0.8 mで、杭と側板による護岸の施設が一部に残る。堆積土中より、「天平」紀年木簡をはじめ、土器、瓦、が多量に出土した。土器は平城宮土器編年Ⅲ、Ⅳ、瓦は平城宮瓦編年Ⅲに属するものである。この溝は全体の様子をみると乱流しており、遺物の年代観からも、天平12~19年の恭仁京遷都時の荒廃期のものと考えている。したがって先述のS D3113へのつけかえは、平城宮へ遷都して後である。墨書土器は20点出土した。「物部連安万呂」、「大凡小長谷造国」の人名がみえる。

**SD10250** 若犬養門西北の池状遺構S G10240から南面大垣を通過して二条大路北側溝S D1250に通じる南北溝である。第133次調査で検出した。溝幅は7.0 m、深さ1.8 m。平城宮造営以前からの旧流路を改修したものである。溝の変遷は複雑で、旧流路も含めて大きく5期に分かれる。改修当初は暗渠であったが、途中いったん開渠にし、再び暗渠にしたのち最後はま

た開渠となっている。「神亀6年」の紀年のある木簡をはじめ土器、瓦が出土している。墨書土器は2点ある。

**SD10325** S D3715の中層が、第一次朝堂院の南端あたりで、一度西に屈曲してふくらみ、南流して再びもとの位置に戻る時期がある。このふくらんだ部分の南北溝にあたる。第140次調査で検出した。幅2.5m、深さ0.8mの素掘りの溝で、S D3715にもどるときに南東へ斜行する。溝の年代は、奈良時代後半である。墨書土器は、3点ある。

**SD10550** 平城宮東部の南北幹線水路であるS D2700に、東から注ぐ東西溝である。第139次調査で検出した。幅2.7m、深さ1.7mの素掘りの溝である。堆積土は上下2層あり、下層からは、「天平元(729)年」と「天平6(735)年」の紀年木簡、最上層からは、「天応元(781)年」の墨書土器が出ている。規模も大きく、この地区の区画割りをきめる基本的な東西溝である。大量の土器が出土したが、墨書土器は、7点である。

**SK10727** 第一次朝堂院地区を画する東築地塀の外側で、東第二堂の東南方向の位置に掘られた大土塹である。第140次調査で検出した。南北8.4m、東西8.7m、深さ0.3mである。平城宮の廃絶に近い時期の土塹で、出土した多量の土器は、平城宮土器編年Ⅳ・Ⅴの時期に属する。墨書土器は5点出土した。

**SD11600** S D3410の北端に東から合流する東西溝である。第154次調査で検出した。幅5.8m、深さ1mの素掘りの溝で、S D3410と交わるには橋がかかる。溝の堆積状況はS D3410と同じである。墨書土器は14点ある。

**SD12340** 伊福部門(西面北門)から東に延びる宮内東西道路の北側溝と考えるものである。第164-21次で検出した。溝幅は約4m、深さ0.7mで上下2層の堆積がある。下層からは「神亀3年」の木簡、上層からは「天平勝宝」～「宝亀4年」の木簡が出土している。しかし、出土した多量の土器は、上、下層とも平城宮土器編年Ⅴが主体で、軒瓦も奈良時代後半のものである。墨書土器は、7点ある。

## 『平城宮出土墨書土器集成Ⅱ』 墨書土器出土遺構一覽

	次 数	出 土 地 区 名	出 土 遺 構
集 成 I の 補 遺	第4次	6ABO—K	
	6	6ABO—J	
	20	6AAO—G	
	21	6AAC—B・H・N	SD2700
	22(南)	6AAF—A	SD3410
	28	6ACC—F	SD3825, SK3831, SK3832
	29	6AAG—C・M	SD3410, SD4575
	32	6AAI—M・N・O	SD1250, SD4090
	32(補)	6AAI—C	SD4100
	102	6ABG—B	SD3715
		104	6ALR—S・T・U
	110	6ALF—I	
	111	6ABG	SD3715
	120	6ALF—P・Q	SD5200, SE9295
	122	6AA Y—B・C・F	SD1250
	128	6ALR—Q	SD3109, SD3113, SD3193, SD3297B, SD9601 SD9620, SD9688, SD9690, SA5760, SA9591 SB8640, SB9606, SB9613, SB9640, SB9592 SK9608A・B・C, SK9691, SX9683, SX9689
	129	6AAA—G	SD2700
	133	6ACU・CH—D・E・H	SD1250, SD10220, SD10250
	136	6ABI・BJ—A・B	SD3715, SD9171, SD10325
	139	6AAA・AB—F・S・T	SD2700, SD10550
	140	6ABI・BV・BU—A・B	SD3715, SD10705, SD10706, SD10325, SK10727
	146	6ABK・BJ・BW—A・B	SD3715
	153	6AAR—C	
	154	6AAD—C・F	SD2700, SD3410, SD4240, SD4850, SD11600, SX11524
	155	6AAI—D	SD1250, SD3410
	157	6ABL—D	SD3715
	157(補)	6ABL—D	SD3715
	164-21	6ADB	SD12340
	165	6AA Y—B・C・O	SD1250, SD4100, SK12050, SK12060 SX12094
	167	6AA Y—B・C・F	SD1250
	溝辺		SD2700